

〈原著論文〉

老年看護学実習が学生の高齢者イメージに与える影響 —地域で暮らす高齢者と学生との世代間交流導入の検討—

The influence of gerontological nursing practice on student's elderly image
— Consideration of introduction of intergenerational exchange between elderly people living
in the community and students —

吉本 和樹¹, 清水 昌美², 兎澤 恵子³

要旨

地域の健康な高齢者との世代間交流は、看護学生の肯定的な高齢者イメージ形成につながるという研究報告がある。今後、本学の老年看護学実習において世代間交流を意識した教育内容を取り入れていく必要性を検討するために現時点での本学学生の高齢者イメージの評価が必要だと考える。そこで今回、本学看護学部2、3年生を対象に老年看護学実習を終えている学生と終えていない学生の高齢者イメージを詳細に分析し、今後の本学の学生に対する世代間交流についての教育内容の方向性について検討することを目的に研究を行った。

祖父母と同居の有無、同居していない祖父母との交流の有無、老年看護学実習履修状況、5項目の高齢者のイメージ等をアンケートの回答項目とした。アンケート結果は二値に変換し、単変量及び二変量で解析を行った。その結果、老年看護学実習済み学生と未実習者の高齢者イメージには、関連がみられなかった。しかし、実習済み学生の高齢者イメージ項目の変数間の関連について χ^2 検定による解析を行った結果、肯定的なイメージの傾向がみられた。

本学の老年看護学において地域で生活する高齢者との世代間交流をとり入れることは、学生の高齢者イメージの傾向を肯定的なものにすることに有効である可能性が示唆された。

キーワード：老年看護学実習，学生の高齢者イメージ，世代間交流

Gerontological nursing practice , Student's elderly image ,
Intergenerational exchange

1. はじめに

日本は世界の中でも比類なき速さで高齢化が進んでおり、全人口における高齢者の割合が高くなっている。日本では高度経済成長期以降核家族化が進み、地域において高齢者と若年者が世代を超えて交流する機会は減少し続けていると思われる。高齢者世代と交流する機会が少ない大学生は、地域で自分らしい生活をしている高齢者のイメージを持ちにくい環境にあるといえるのではないだろうか。今後、看護学教育の中で、豊かな高齢者像や高齢者観を学生が持てるようにする取り組みがより一層求められてくることが予想される。

看護学生の高齢者イメージに関する研究を概観すると、看護学生に対して老年看護学実習前後や

講義前後での高齢者イメージを調査した研究（穴井ら，2012；保坂ら，1988；伊藤ら，2010；桂ら，2008；木村ら，2013；金原ら，2018；草地ら，2007；岡本ら，2011；炭多ら，2017；高岡ら，2011）が多くみられる。また、祖父母との同居が学生の高齢者イメージに影響を与えると報告する研究（木村ら，2013；大塚ら，1999）がある一方で、祖父母との同居は学生の高齢者イメージとは関連がないとする研究（畑野ら，2010）もある。さらに、学生の高齢者のイメージ形成には、祖父母の態度が関連する可能性があることから、世代間の思いやりのある交流の重要性について述べられた研究（奥村ら，2009）もある。

以上の先行研究のほとんどは、老年看護学の講

1 Kazuki YOSHIMOTO 千里金蘭大学 看護学部
2 Masami SHIMIZU 千里金蘭大学 看護学部
3 Keiko TOZAWA 千里金蘭大学 看護学部

受理日：2018年9月7日
査読付

義あるいは老年看護学実習前後での学生の高齢者イメージの変化を報告したものであるが、地域で暮らす健康な高齢者との交流による学生の高齢者イメージの変化を報告した研究（渡邊ら, 2011）もある。渡辺らは、学生が実際に地域で生活する健康な高齢者との交流を行った結果、高齢者に対して、あたたかさやきちんとしているという肯定的なイメージを持つことが出来るようになったと報告している。本学の老年看護学では、地域で生活する健康な高齢者と実際に接する取り組みをおこなっていない。今後、本学の老年看護学の講義あるいは実習において地域で生活する高齢者との世代間交流を意識した内容を取り入れていくことも検討する必要があるのではないかと考える。そこで今回、本学看護学部の2、3年生を対象に老年看護学実習を終えている学生と終えていない学生の高齢者イメージについて詳細に分析し、今後の本学における世代間交流に関する教育の方向性について検討することを目的に研究を行った。

2. 研究方法

1) 対象及び調査方法

本学看護学部の2年生、3年生を対象とし、世代間交流への興味の有無、同居する祖父母の有無や同居していない祖父母との交流の有無、高齢者についての感じ方や考え方についてアンケートを行った。調査時期は、2018年2月15日から2018年3月30日で、年度末に行われた学年行事終了後に実施した。

2) 調査内容

学年、年齢、祖父母と同居の有無、同居していない祖父母との交流の有無と交流の方法及び頻度、老年看護学実習履修状況、高齢者に対してあたたかいイメージがあるか、高齢者に対して話しやすいと感じているか、高齢者に強いというイメージをもっているかどうか、高齢者は何を考えているのかわからないと感じているかどうか、高齢者はきちんとしているというイメージをもっているかどうか、世代間交流の興味の有無、高齢者に伝えたいことがあるかどうか、過去のボランティア歴の有無をアンケートの回答項目とした。なお、高齢者イメージの項目については先行研究（穴井ら, 2012; 草地ら, 2007; 奥村ら, 2009）での高齢者イメージの項目を参考に作成した。

3) 分析方法

質問により得られた各回答については二値に変換し、単変量及び二変量で解析を行った。さらに、老年看護学実習履修状況については「実習済み群」と「未実習群」の二群に分け、単変量及び二変量解析を行った。

統計解析には、SPSS Ver.19を使用、記述統計とPearsonの χ^2 検定を用い、統計学的有意水準は $p < .05$ とした。

4) 倫理的配慮

研究対象となる学生には、研究への参加は任意であり、参加・不参加による不利益が生じないこと、アンケートは無記名とし、参加協力は断ることが出来ること、白紙での提出あるいはアンケート用紙の破棄を認めること、アンケート提出をもって、研究参加の同意が得られたと判断することを口頭で十分に説明した。また、アンケート回収ボックス周辺には研究者が近づかないようにした。さらに調査項目に個人を特定するような設問を作らず、対象者の個人情報や匿名性を確保した。本研究は研究者が所属する機関の研究倫理委員会の承認を受けて実施した。

3. 結果

1) 対象者の概要

2年生110人、3年生96人の206人を対象とし、同意の得られた181人の回答を回収した。そのうち、質問の回答に欠損がみられるものを除外し、最終的に159人を分析対象とした（有効回答率87.8%）。2年生86人、3年生73人、平均年齢は20.72歳で、実習済みの学生（3年生）は51人であった。

参加学生159人のうち、祖父母と同居していない人は、139人で全体の87.4%であった。また、高齢者に興味がありもっと話がしたいと回答した学生は82人で全体の51.6%、世代間交流について興味があると回答した学生は89人で全体の56.0%であった。高齢者のイメージについては、あたたかいと回答した学生は全体の93.1%、話しやすいと回答した学生は全体の84.9%、きちんとしていると回答した学生は全体の86.1%であり、回答に偏りがみられた。

表1 回答の内訳 N=159

	人数	割合
祖父母と同居なし	139	87.4%
祖父母と同居あり	20	12.6%
世代間交流に興味がない	70	44.0%
世代間交流に興味がある	89	56.0%
老年看護学実習済み	51	32.0%
老年看護学実習未実習	108	68.0%
高齢者と話したくない	77	48.4%
高齢者ともっと話したい	82	51.6%
ボランティア経験なし	97	61.0%
ボランティア経験あり	62	39.0%
高齢者のイメージ		
冷たい	11	6.9%
あたたかい	148	93.1%
話にくい	24	15.1%
話やすい	136	84.9%
弱い	51	32.1%
強い	108	67.9%
考えが理解できない	83	52.2%
考えが理解できる	76	47.8%
だらしない	22	13.8%
きちんとしている	137	86.1%

2) 各変数間の関連

(1) 老年看護学実習の履修状況とその他の変数との関連

老年看護学実習の履修状況とその他の変数との関連をみるためにクロス集計表を作成し、 χ^2 検定を行った。その結果、実習済み学生は未実習の学生よりも、高齢者と話したいと思う学生の割合が高いこととの関連がみられた ($p<.05$)。一方、祖

表2 実習履修状況と変数との関連 N=159

	老年看護学実習未実習 (人)	老年看護学実習済み (人)	P 値
祖父母と同居なし	95(46.0%)	44(54.0%)	0.7644
祖父母と同居あり	13(30.0%)	7(70.0%)	
世代間交流に興味がない	51(72.9%)	19(27.1%)	0.7574
世代間交流に興味がある	57(64.0%)	32(36.0%)	
高齢者と話したくない	59(76.6%)	18(23.4%)	0.0228*
高齢者ともっと話したい	49(32.9%)	33(67.1%)	
ボランティア経験なし	65(67.0%)	32(33.0%)	0.2373
ボランティア経験あり	43(69.4%)	19(30.6%)	
高齢者のイメージ			
冷たい	7(63.6%)	4(36.4%)	0.7521
あたたかい	101(68.2%)	47(31.8%)	
話にくい	16(66.7%)	8(33.3%)	0.8861
話しやすい	92(68.1%)	43(31.9%)	
弱い	31(60.8%)	20(39.2%)	0.1850
強い	77(71.3%)	31(28.7%)	
考えが理解できない	61(73.5%)	22(26.5%)	0.1159
考えが理解できる	47(61.8%)	29(38.2%)	
だらしない	15(68.2%)	7(31.8%)	0.9778
きちんとしている	93(67.9%)	44(32.1%)	

注) χ^2 検定 * $p<.05$

父母との同居の有無、世代間交流についての興味の有無、ボランティア経験の有無については、実習履修状況との関連はみられなかった。また、5つの高齢者イメージ項目において、考えが理解できるかどうかと強いか弱いかについては、未実習群よりも実習済み群のほうが肯定的な回答の割合が高い傾向がみられたが、いずれの項目も、統計学的有意な関連はみられなかった。

(2) 世代間交流への興味と他の変数との関連

世代間交流について興味があるかどうかと他の変数及び高齢者イメージとの関連をみるためにクロス集計表を作成し、 χ^2 検定を行った。その結果、世代間交流への興味がある学生は興味がない学生よりも、高齢者ともっと話したいという学生の割合が高いこととの関連がみられた ($p<.05$)。一方、世代間交流への興味と高齢者のイメージについては、世代間交流への興味がある学生は興味がない学生よりも、高齢者をあたたかいとイメージする割合が高いこととの関連がみられた ($p<.05$)。

(3) 高齢者イメージの各変数間における関連

学生の高齢者へのイメージの変化を比較するために、老年看護学実習未実習学生と実習済み学生の二群に分けた。そして、高齢者の5つのイメージ変数のうち、変数間の関連をみるためにク

表3 世代間交流への興味と他の変数との関連 N=159

	世代間交流に興味がない (人)	世代間交流に興味がある (人)	p値
老年看護学実習未実習	51(47.2%)	57(52.8%)	0.2373
老年看護学実習済み	19(37.2%)	32(62.8%)	
祖父母と同居なし	64(46.0%)	75(54.0%)	0.1766
祖父母と同居あり	6(30.0%)	14(70.0%)	
高齢者と話したくはない	43(55.8%)	34(44.2%)	0.0036*
高齢者ともっと話したい	27(32.9%)	55(67.1%)	
ボランティア経験なし	48(49.5%)	49(50.5%)	0.0828
ボランティア経験あり	22(35.5%)	40(64.5%)	
高齢者のイメージ			
冷たい	8(72.7%)	3(27.3%)	0.0469*
あたたかい	62(41.9%)	86(58.1%)	
話にくい	14(58.3%)	10(41.7%)	0.1254
話しやすい	56(41.5%)	79(58.5%)	
弱い	21(41.2%)	30(58.8%)	0.6190
強い	49(45.4%)	59(54.6%)	
考えが理解できない	42(50.6%)	41(49.4%)	0.0808
考えが理解できる	28(36.8%)	48(63.2%)	
だらしない	10(45.5%)	12(54.5%)	0.8843
きちんとしている	60(43.8%)	77(56.2%)	

注) χ^2 検定 * $p<.05$

表4 高齢者イメージ間での関連

	未実習群 (人)		N=108	実習済み群 (人)		N=51
	冷たい	あたたかい		冷たい	あたたかい	
話にくい	6 (37.5%)	10 (62.5%)	P<0.001*	4 (50%)	4 (50%)	P<0.001*
話しやすい	1 (1.1%)	91 (98.9%)		0	43 (100%)	
弱い	4 (12.9%)	27 (87.1%)	0.0854	4 (20%)	16 (80%)	0.0095*
強い	3 (3.9%)	74 (96.1%)		0	31 (100%)	
わからない	5 (8.2%)	56 (91.8%)	0.4095	3 (13.6%)	19 (86.4%)	0.1801
理解できる	2 (4.3%)	45 (95.7%)		1 (3.5%)	28 (96.6%)	
だらしない	6 (40%)	9 (60%)	P<0.001*	2 (28.6%)	5 (71.4%)	0.0281*
きちんとしている	1 (1.1%)	92 (98.9%)		2 (4.6%)	42 (95.5%)	
	話にくい	話しやすい		話にくい	話しやすい	
弱い	7 (22.6%)	24 (77.4%)	0.1495	6 (30%)	14 (20%)	0.0240*
強い	9 (11.7%)	68 (88.3%)		2 (6.5%)	29 (93.6%)	
考えがわからない	13 (21.3%)	48 (78.7%)	0.0304*	5 (22.7%)	17 (77.3%)	0.2285
考えが理解できる	3 (6.4%)	44 (93.6%)		3 (10.3%)	26 (89.7%)	
だらしない	6 (40%)	9 (60%)	0.0031*	3 (42.9%)	4 (57.1%)	0.0333*
きちんとしている	10 (10.8%)	83 (89.2%)		5 (11.4%)	39 (88.6%)	
	弱い	強い		弱い	強い	
考えがわからない	13 (21.3%)	48 (78.7%)	0.0530	11 (50%)	11 (50%)	0.1695
考えが理解できる	18 (38.3%)	29 (61.7%)		9 (31%)	20 (69%)	
だらしない	6 (40%)	9 (60%)	0.2973	6 (85.7%)	1 (14.3%)	0.0067*
きちんとしている	25 (26.9%)	68 (73.1%)		14 (31.8%)	30 (68.2%)	
	理解にくい	理解しやすい		理解にくい	理解しやすい	
だらしない	9 (60%)	6 (40%)	0.7671	4 (57.1%)	3 (42.9%)	0.4205
きちんとしている	52 (55.9%)	41 (44.1%)		18 (40.9%)	26 (59.1%)	

注) χ^2 検定 *p<0.05

ロス集計表を作成し、 χ^2 検定を行った。その結果、未実習群及び実習済み群ともに、高齢者のイメージについてあたたかいイメージを持つ学生は冷たいとイメージする学生よりも、話しやすいとイメージする割合が高いこととの関連がみられた (p<.05)。また、あたたかいイメージを持つ学生は冷たいとイメージする学生よりも、きちんとしているとイメージする割合が高いこととの関連がみられた (p<.05)。そして、話しやすいとイメージする学生は話にくいとイメージする学生よりも、きちんとしているとイメージする割合が高いこととの関連がみられた (p<.05)。

次に未実習群でみた場合、話しやすいとイメージする学生は話にくいとイメージする学生よりも、高齢者の考えが理解できるとイメージする学生の割合が高いこととの関連がみられた (p<.05)。なお、あたたかいとイメージする学生は冷たいとイメージする学生よりも、強いとイメージする学生の割合が高かったが、統計学的有意はみられなかった。

そして実習済み群でみた場合、あたたかいとイメージする学生は冷たいとイメージする学生よりも、強いとイメージする学生の割合が高いこととの関連がみられた (p<.05)。また、話しやすいとイメージする学生は話にくいとイメージする学

生よりも、強いとイメージする学生の割合が高いこととの関連がみられた (p<.05)。一方、話しやすいとイメージする学生は話にくいとイメージする学生よりも、高齢者の考えが理解できるとイメージする学生の割合が高かったが、統計学的有意はみられなかった。

4. 考察

1) 実習済み学生の高齢者イメージについて

5つの高齢者イメージ項目のうち3つの項目は、実習済み学生と未実習学生の回答の割合について、否定的な回答の割合に変化がなかった。近藤ら(1993)は高齢者のイメージについて、老年看護学実習後に総じて否定的な方向に変化すると報告しており、桂ら(2008)も看護学生の1年生から4年生が抱く認知症の高齢者の17項目のイメージで、16項目が否定的評価を示したと報告している。本研究においても5つの高齢者イメージのうち3つにおいて否定的な高齢者イメージの割合が変わらなかったという点では、上記の先行研究と類似する結果を得ることが出来ているのではないかと考える。しかし他の研究では、老年看護学実習前後の高齢者のイメージを比較した場合、実習後に高齢者のイメージの項目の多くが肯定的イメージに傾く(穴井ら, 2012; 伊藤ら, 2010)と報告して

いる。このように先行研究では、老年看護学実習後に高齢者イメージが肯定的に傾くという報告と否定的に傾くという報告がある。今回、我々は老年看護学実習済み学生と未実習学生における高齢者イメージ項目の関連の解析とは別に、高齢者イメージの項目間での解析も行っている。その結果、未実習学生よりも実習済み学生のほうが、イメージ項目間において肯定的な関連が多くみられるということを明らかにすることが出来た。このことから、学生の肯定的な高齢者イメージの形成には、老年看護学実習が強く関連していることを確認することが出来たと考える。

2) 学生の世代間交流への興味と高齢者イメージとの関連について

本研究では、学生の世代間交流についての興味と高齢者イメージとの関連で、世代間交流に興味がある学生は興味がない学生よりも、高齢者をあたたかいとイメージする割合が高いこととの関連がみられた。ただし、その他の4つの高齢者イメージの項目においては関連がみられなかった。その要因として、学生が老年看護学実習で虚弱な高齢者を受け持ち高齢者として担当する傾向があることが関係しているのではないだろうか。実際に地域で生活する健康な高齢者と接したことがない学生に対して、講義等で高齢者の肯定的な側面を強調して伝えていたとしても、実習での虚弱な高齢者との経験が強くイメージとして残る可能性が考えられる。渡邊ら(2011)は、地域で生活する健康な高齢者と世代間交流できる実習をすることで学生の高齢者イメージが肯定的に好転したと報告している。今後、実習等で本学学生が地域で暮らす健康な高齢者と接する機会を持てるような取り組みについても考えていく必要があるのではないかと考える。

5. 結論

本研究において、老年看護学実習後の学生と未実習の学生では高齢者イメージとの関連はみられなかった。しかし、学生の高齢者イメージ間の関連では未実習の学生よりも実習済みの学生のほうがより多くの高齢者イメージ項目間で肯定的な関連がみられた。

未実習学生と実習済み学生の高齢者イメージの関連から、老年看護学実習が学生の高齢者イメージ形成に影響を与えていると考えられる。今後、

学生の高齢者に対する肯定的なイメージ形成に向けて、実習等で本学学生が地域で暮らす健康な高齢者と接する機会を持てるような取り組みについても考えていく必要があるのではないかと考える。

6. 研究の限界

今回の調査は、2、3年生を対象としており、対象となった学生の教育を受けた背景に偏りがあると考えられる。今後は、経年的かつ、学年ごとの調査研究となるように考慮する必要がある。また、本研究は1大学のみの実施であり、一般化は困難である。以上の点を踏まえ、今後の本大学での世代間交流への取り組みについての評価を継続的に行っていく必要があると考える。

文献リスト

- 穴井美恵, 荻野朋子, 大平政子. 看護大学生の高齢者のイメージ 高齢者施設における実習前後の変化. 中京学院大学看護学部紀要. 2012; 2(1):11-7.
- 張平平, 大塚真理子, 辻玲子, 畔上光代, 丸山優, 善生まり子. 看護学生と地域高齢者との世代間交流がもたらした成果 文献研究を通して. 埼玉県立大学紀要. 2013; 15:43-51.
- 畑野相子, 北村隆子, 安田千寿. 老年看護学教育プログラムが看護学生の高齢者イメージ形成過程に影響する要因(第1報): 1年次から2年次における老年看護学授業前後の比較(研究ノート). 人間看護学研究. 2010; 8:35-45.
- 保坂久, 袖井 孝. 大学生の老人イメージ-SD法による分析. 社会老年学. 1988; (27):22-33.
- 伊藤豊美, 住垣千恵子, 後藤友美, 岩崎孝子, 林稚佳子. 老年看護学実習における看護学生の高齢者に対するイメージの変化. 国立看護大学校研究紀要. 2010; 9(1):37-42.
- 桂晶子, 佐藤このみ. 看護大学生が抱く認知症高齢者のイメージ. 宮城大学看護学部紀要. 2008; 11(1):49-56.
- 木村典子, 石川幸生, 青木葵. 大学生の抱く認知症高齢者のイメージと関連要因. 東邦学誌. 2013; 42(1):75-87.
- 金原京子, 小川宣子, 田中真佐恵, 吉井輝子, 松田千登勢. 早期体験型の老年看護学実習における看護学生の学びの様相—実習前後での高齢者イメージ・高齢者観に焦点をあてて. 摂南大学看護学研究. 2018; 6(1):42-9.
- 近藤益子, 太田にわ, 池田敏子, 前田真紀子, 伊東

- 久恵, 太田武夫. 看護学生の老人施設実習前後における老人観及び老人イメージの変化に関する研究. 岡山大学医療技術短期大学部紀要 1993; 3:105-113.
- 草地潤子, 千葉京子. 老年看護学学習過程における学生の認知症高齢者に対するイメージの変化. 日本赤十字武蔵野短期大学紀要. 2007; 20:15-24.
- 岡本麗子, 榊原千佐子, 小堀ゆかり, 高岡哲子. 老年看護学における看護学生が捉えた高齢者イメージの変化 2年次から3年次の分析を中心に. 北海道文教大学研究紀要. 2011; (35):65-74.
- 奥村由美子, 久世淳子. 大学生の高齢者イメージに関連する要因—認知症高齢者と健常高齢者のイメージの比較—. 日本福祉大学健康科学論集. 2009; 12:31-8.
- 大塚邦子, 正野逸子, 日浦瑞枝, 白井由里子. 看護学生の老人のイメージに関する研究: SD法によるイメージ評価と描画特徴とを中心に. 老年看護学. 1999; 4(1):98-104.
- 佐藤敏子. 老年看護学教育において世代間交流を学ぶ意義. 老年看護学. 2006; 10(2):77-84.
- 炭多雄人, 大久保幸子, 河村沙織, 妹尾眞梨菜, 鈴木千絵子. 認知症高齢者の BPSD (行動心理学的症候) のイメージに関する研究: 看護学生のアンケートから. 関西福祉大学研究紀要. 2017; 20:83-90.
- 高岡哲子, 岡本麗子, 榊原千佐子, 小堀ゆかり. 看護学生が老年看護学概論の講義終了時に持った高齢者イメージの検討. 北海道文教大学研究紀要. 2011; (35):25-35.
- 渡邊裕子, 森田祐代, 流石ゆり子, 萩原理恵子, 小山尚美, 中澤緑, 水口哲, 森本清, 深沢勝彦. 地域リーダー高齢者の若者イメージと若者との交流に対する期待感: 「看護学生との交流事業」参加前の調査から. 山梨県立大学看護学部紀要. 2010; 12:9-18.
- 渡邊裕子, 森田祐代, 流石ゆり子, 萩原理恵子, 小山尚美, 中澤緑, 水口哲, 森本清, 深沢勝彦. 看護学生との交流による地域リーダー高齢者の若者イメージの変化. 山梨県立大学看護学部紀要. 2011; 13:27-35.